

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

イモカタバミ (*Oxalis articulata* Savigny)

下村 孝 (京都府立大学人間環境学部, simon@kpu.ac.jp)



イモカタバミは、わが国の図鑑類にはパラグアイ原産¹⁾または南米原産²⁾と記載されている。しかし、筆者が入手したアルゼンチン発行の図鑑³⁾によって、ブラジル、ウルグアイ、パラグアイ、アルゼンチンなど広域に渡って自生することが判明した。わが国には、第二次世界大戦後に導入されたとされており、観賞用グラウンドカバーとして、庭や街路に利用されるようになっている (写真上右)。肥沃な土壌と日当たりを好むが、半日陰にも耐えるので、根締めや街路樹の下木などにも向く。4月以降の一斉開花 (写真上左右) は見事である。

グラウンドカバーとして生産されているが、日本植木協会の供給可能量・調達難易度調査書に記載がないため、生産量の把握は困難である。しかし、利用も広がりを見せているため、今後の普及が期待される。同じ南米原産とされる強雑草のムラサキカタバミ (*Oxalis corymbosa* DC.) と混同されることがあるが、塊茎を持ち、濃いピンクの花を着け、花粉が黄色い (写真上左) イモカタバミと鱗茎を作り、薄いピンクの花を付けるムラサキカタバミは容易に区別できる。一方、生育特性に関する知見は極めて乏しく、筆者らの調査で塊茎のサイズと令が出葉数や花茎数に比例すること、塊茎を分割しても苗生産が可能であることなどを明らかにした⁴⁾のみである。今後の研究が期待される。

イモカタバミの塊茎 1 個を植え付けると上部の 1~数個の芽が萌芽し、1 年後には葉の付け根の茎が膨らんで新塊茎となる。植え付けた塊茎は消滅せずに残るため、新塊茎と段重ねになる。



さらに年々肥大するため、年を経た株の塊茎は複数に枝分かれした重ね餅のような形態をとる (写真下左)。筆者が掘りあげた推定 15 年生の株では最基部にあった塊茎は直径が 10cm 余あった。こんな風に、こんもりとしたコロニーを作って冬季も緑を保つため、グラウンドカバーとして有望である。さらに、白花変種もある。ただし、一つ、なかなか厄介な欠点がある。

実は、筆者は、イモカタバミが常緑だと誤解していた。しかし、梅雨時に無数の花を咲かせた後、地上部が徐々に衰退して消滅し、休眠に入ることが分かった。塊茎のくびれは休眠期の証である。数年前、ロンドンの庭園史博物館庭で見かけた株の塊茎にくびれが無いことを発見して驚いたが、同時に、休眠の原因が夏の高湿だという考えの裏付けを得た思いである。しかし、解明は今後の課題である。梅雨までに蓄えた養分が新塊茎と植え付けた塊茎に分配されており、9月に入って気温が下がり始めると、新塊茎上部の芽が萌芽する。出葉するとともに花を付け、11 月頃まで咲き続ける。冬季は、葉が赤く色づいて美しいが、花は付けない。それが光、温度いずれの影響によるのかは不明である。開花後、朔果を着け種子を含む事もあるが、筆者は、実生には成功していない。

深植えしても地表に播き付けても生育可能で、緑化用植物としての可能性は大といえる。

- 1) 塚本洋太郎 (総監修) (1994) 園芸植物大事典コンパクト版 1 巻, 小学館, pp.15-24.
- 2) 花葉会編 (2002) アーバンガーデニング, 講談社, p.81.
- 3) Dimitri, M. J. (1980) Descripcion de las especies cultivadas en la Argentina, Enciclopedia Argentina de Agricultura y Jardineria (TOMO1), Editorial acme S.A.C.I. Buenos Aires, pp.657-660.
- 4) Shimomura, T., Hirai, J. and Kondo T. (2001) Effect of size, age and division of tuber on the growth of *Oxalis articulata* Savigny, Journ. Jpn. Soc. Reveg. Tech.27:131-135.